

疑惑の漁業補償6千万円

諫早湾干拓の調査で「漁業被害が出た」として支払われた多額の補償。しかし、漁獲量は前年を上回っていた。補償金の狙いは何だったのか。

「ギロチン」ばしてから潮のぬるう(遅く)なって赤潮もしよつちゆう。ノリの色落ちも早うなった」

97年4月の諫早湾閉め切り、別名「ギロチン」以降、不漁に苦しむ有明海沿岸のある漁民はそう嘆く。

自然を大改造した諫早湾干拓事業こそ不漁の最大の原因。海の変化から、その肌身に感じている有明海の漁民たちは、潮受け堤防の排水門を開く中、長期開門調査で漁業被害との因果関係の調査を求めてきた。その要望を、亀井善之農水相は

5月11日、正式に拒否した。最大の理由は、排水門の開放で流入する海水によって潮受け堤防内の「ガタ土」がえぐられ、諫早湾から有明海に広がり、漁業被害をもたらすというのだ。不漁にあえぐ有明海漁民の苦しみを逆手にとったような理屈である。

「農水省の自作自演」

確かに、02年4月から約1カ月実施された短期開門調査ではアサリの死(斃死)と呼ぶ)などの被害が出たとして、農水省は昨年未、諫早湾岸の小長井(小長井町)、瑞

穂(瑞穂町)、神代(国見町)、土黒(同)の4漁協に合わせて約6千万円の補償金を支払った。ところが、である。

諫早湾沿岸を歩き回って漁民たちに話を聞くと、

「97年の閉め切り以降、アサリの生育はずっとよくない。短期調査期間中にもアサリは死んだが、それはいつもと同じ。特に開門調査をやったからではない」

02年の短期開門調査で水門が開かれ、堤防内の有明海が海水が流れ込んだ

と口々に証言する。中には短期調査の「被害」と農水省の補償は「自作自演です」と言う漁民もいた。

そもそも、アサリがどれだけ死んだのかも農水省は公表していない。「補償額の算定に絡み、個人情報につながらることだから」(九州農政局)だという。海水導入前の4月と海水導入後の6月、9月の3回、諫早湾内の15地点、各20ポイントで調査をした結果、「斃死率に明らかな差が認められた」と言うばかりである。

農水省から被害調査を委託された財団法人・九州環境管理協会がまとめた文書によれば、ふだんは淡水化されている堤防内の調整池に短期開門調査で海水を出し入れた結果、諫早湾奥部で塩分が平均濃度の3分の2程度まで低下。

にこり(濁度)も海水導入前の10前後からピーク値で900程度まで上昇したことなどでアサリが斃死したとされる。

しかし、元中央水産研究所室長の佐々木克之氏は、「もともとアサリは河口の低塩分になる領域に生息するものだし、



900というにこりも排水門そばの数値で、アサリの養殖場では数十程度。それでアサリが死んだとは言えない。第一、農水省は事前にコンピューターによるシミュレーションで被害が出ないと予測していたんです」

と指摘する。農水省が短期調査の事前説明会で配った文書も「漁業への影響の可能性は小さいと考えられます」と明記している。

中長期調査阻止の布石

短期調査中に諫早湾岸4漁協を巡回して漁業被害の有無と海の様子を観察していた長崎県・県南水産業普及指導センターの秋永高志所長もこう語る。

「短期調査中にヘテロシグマ赤潮が断続的に発生していたが、この赤潮は毒性は強くない、魚介類が斃死することはほとんどない。漁民からアサリに被害が出たという話も聞いていません」

なにより、4漁協中最大で、アサリ養殖が最も盛んな小長井漁協のアサリの漁獲高を見ると、97年6177トン▽98年5211トン▽99年387トン▽00年594トン▽





一人当たり30万円ほど。それでも、生活が苦しい漁民は現金が欲しい。「不満を抑えるアメです」とある漁民は自嘲気味に言った。湾内漁民が干拓反対に転じれば状況は大きく変わる。被害が確認されないのに、「あった」として農水省が漁業補償を支払ったのは、それを防ぐためだったようだ。

3県漁民は02年の「政治的取引」に激怒。漁連会長を突き上げ、その後も中・長期調査を要求し続けられており、5月24日には総決起集会を開いた。短期調査の顛末を見れば、農水省の中・長期調査見送りの「漁業被害が出る」という理由が破綻しているといえそうだと。

ルボライタイ 永尾俊彦

01年2222トン▽02年4040トン▽03年522トンと、02年が最悪というわけではない。むしろ、短期調査後に稚魚が大量発生し、昨年は3年ぶりに500トン台に回復した。結果として、短期開門調査で「逆に好影響があった」というのが大方の漁民の見方だ。

一方、諫早湾閉め切り後にアサリの大量死は数回あった。漁民たちは「干拓の排水のせいだ」と農水省の干拓事務所などに補償を求めたが、干拓事務所は頑として因果関係を認めなかった。

ではなぜ、明白な被害がなかった02年分だけ補償金が払われたのか。それは、中・長期開門調査を阻止する布石として、農水省が短期調査だけはやらざるをえなかったからだろう。

06年完成で政治決着

02年4月15日深夜、短期調査を求める佐賀、福岡、熊本の3県漁連会長と、干拓推進の立場から短期調査絶対反対の長崎県知事が武部勤農水相(当時)を交え、東京で会談した。会合には福岡選出の古賀誠、長崎選出の久間章生の両衆院議員も立ち会った。

(こ)でまとまったのが、06年の

干拓完成を3県漁連会長がのむかわりに、長崎県知事が短期調査のむという政治決着だった。06年完成のためには、半年から数年、工事を中断させることになる中、長期調査はできない。つまり、農水省は短期調査実施と引き換えに3県漁連トップに中・長期調査の見送りを認めさせた格好だ。

裏を返せば、農水省はこうしても短期調査だけは実施する必要に迫られていた。しかし、3県漁連とは違って、諫早湾内4漁協は狭い排水門から海水が入りやすいことで漁業被害が出ると強硬に反対した。

諫早の漁民によれば、短期調査の地元説明会で長崎県の干拓室の職員が「中・長期調査をやらせないために短期調査に協力してください」と言ったという。

短期調査では、農水省が排水門の開け方を工夫して漁業被害はでなかったが、同省は4漁協を説得するため、初めから被害が出ようとして出まいと補償金を払う心積もりだったのではないか。そして、農水省の中・長期調査見送りの判断は、その時点ですでに決まっていたと見ることができる。

4漁協の立場は微妙だ。もともと

と4漁協は干拓反対だった。大型の二枚貝タイラギの潜水漁で年間水揚げが2000万円を超える漁民も少なくなかった。

ところが、農水省と長崎県に「諫早市の防災に協力して欲しい。干拓をしても漁業は可能です」と懇願され、補償金での切り崩しもあつて干拓を受け入れた。

工事が始まると、タイラギ漁は壊滅。アサリの養殖だけでは生活

続く漁民の苦しみ

生活を干拓工事に頼っている以上、彼らは今は干拓推進の立場。ただ、工事が06年に完成した後はどうするのか。本当は漁で暮らしたい。短期調査で実証されたように、排水門を開ければこの海はよみがえると言う漁民も少なくない。

が、養殖アサリの種子や砂を買うにも干拓を進める農水省や県の補助金に頼らざるをえない。短期調査の補償金は小長井漁協の場合、

諫早湾干拓事業とは 湾の3分の1を閉め切り 構想当初の目的はコメづくり

1952年に水田造成を目的に長崎大千拓構想として持ち上がった。今の事業になったのは82年。背後の低地の排水改善や洪水、高潮などの防災対策と畑作が目的で、総事業費約2500億円。89年着工。進捗率は03年度末で予算ベースで95%。湾の3分の1の3542ヘクタールを約7キロの潮受け堤防で閉め切り、942ヘクタールの農地を造成する。潮受け堤防

と内部堤防の間に調整池が設けられ、背後地の水はけをよくするため、調整池の水位は海抜マインスイメートルに保たれている。この水は干拓地の農業用水でもある。抜群の浄化能力のあった諫早干潟をつぶし、流入河川の水を貯めてからマインスイメートルを超えると排水している。この排水や閉め切りによる潮流の鈍化などが漁業被害の原因だと有明海漁民は主張してい

る。

01年、有明海で空前のノリの色落ち被害が起き、農水省は第三者委員会を設置。同委員会は事業との因果関係を検証するため、2カ月程度(短期)、半年程度(中期)、数年(長期)の開門調査を提言した。開門調査とは、ふだんは水を出さだけの排水門から海水を出し入れし、調整池や有明海の水質、潮流などの変化を調べること。

02年の短期調査後、農水省が同省OBを中心に設置した検討会議は昨年末、中・長期調査で期待できること、できないことを両論併記でまとめ、農水相の最終判断が注目されていた。